

竹取物語に見られる多文化

マルティン・ティララ*

1. 『竹取物語』と多文化

近年、多文化社会あるいは多文化主義という言葉をよく耳にする。多文化共生社会はグローバル化と同じく、とても現代的な現象だと思われるが、古代社会や昔の国にこそ様々な民族や文化は問題なく共存していた。古代大和も同じようであったと簡単に推測できる。平城京（現在の奈良）、そして平安京（現在の京都）という、「なにかしら固定的で、動きの少ない、純粋性・固有性が特徴のように思われがちだ。たしかにその側面も重要であることはむろんだが、たえず外界、特に国際的環境のもとで京都の歴史と文化が発展していったことを忘れてはならないだろう。その特徴が、渡来の人と文化であった。」（井上光郎：14-15）要するに、渡来人と渡来人の文化は古代社会の多文化の必然的な要素であったと言える。

『源氏物語』の作家である紫式部により「物語の出で来はじめの祖」と称され、飛鳥と奈良時代を舞台にした『竹取物語』は割りと短い作品だが、その中に多文化の相違と共生がはっきり見えると思う。『竹取物語』は9世紀の終わりに完成されたと推定されているが、飛鳥と奈良時代の多文化社会だけではなく、おそらく9世紀後半の渡来の人と文化に対する考え方も含まれていただろう。

『竹取物語』に見られる多文化の場面を大まかに分けると二つのグループに分類できる。第一に、

両立しがたいイデオロギーを上手に絡み合わせられる場面、第二に、他界との出会いの場面である。勿論、多文化はある決まった社会に存在している。『竹取物語』の場合、8世紀初頭と9世紀後半の日本の社会、そして作品自体は日本文学の流れの中に位置を占めているので、それ以前の作品も考えなければならない。似通った話を『万葉集』（巻十六）、もしくは『風土記』、丹後風土記の「奈具社」と近江風土記の「伊香小江」の話の中に見られるが、その竹取の翁と九人の天女との出会い、それから『風土記』の羽衣型の伝説は疑う余地なく中国の文学に由来している。しかし、『竹取物語』の作者たちはこのような簡単な話を越え、より巧妙で、当時中国大陆で見たことのない物語に書きかえた。

2. 難題と道教的な幻想

第一の多文化の場面は、特に五人の求婚者とその難題の話にみられる。全ての難題はインドあるいは中国の文化に関わるもので、何百年もの研究のおかげでそれぞれの難題の出典が明らかにされた。かぐや姫に求められている物は全て不死・永遠の命を得られるものであった。おそらく道教の道を歩む信者が希望していただろう。

第一の求婚者、石作の皇子の話をみると、天竺にある石の鉢を取りにいわずにいた皇子は偽物を持ってきて恥をさらす。話の内容に関わらず、かぐや姫に求められていた石の鉢はお釈迦様の伝統的な鉢であった。その鉢を手に入れると、お釈迦

*カレル大学准教授

様と同じような能力を得ることができると考えられていた。もう一つの説によると、この鉢は道教の錬金術師に高く評価された物で、錬金術師はその鉢の中で不死の薬を作っていたそうである。

第二の庫持の皇子は蓬萊の玉の枝を持ってくるよう言われたが、庫持の皇子は最初から腐った人間で、偽物を作らせる。最終的に偽物だとばれてしまうが、蓬萊という不死の人の山(島)、そしてその山の上に生える銀の木などは道教の古典と思われる『列子』に詳しく記述されている。『竹取物語』の作者はおそらくこの記述に憧れていただろう。『列子』によると蓬萊のような山は昔五つもあった。

「其中有五山焉：①一日岱輿，二曰員嶠，三曰方壺，四曰瀛洲，五曰蓬萊。其山高下周旋三萬里，其頂平處九千里。山之中間相去七萬里，以為鄰居焉。②其上臺觀皆金玉，其上禽獸皆純縞。珠玕之樹皆叢生，華實皆有滋味，食之皆不老不死。所居之人皆仙聖之種。」(『列子』：湯問 2)

下線部の読み下し文：

- ①一に岱輿^{たいよ}と曰ひ、二に員嶠^{みんけう}と曰ひ、三に方壺^{ほうこ}と曰ひ、四に瀛洲^{えいしう}と曰ひ、五に蓬萊^{ほうらい}と曰ふ。
②そのうえの台觀皆金玉、その上の禽獸皆純縞、珠玕^{しゅかん}の木皆叢生^{そうせい}し、華実皆滋味あり。これをおひて皆老いず死なず、おる所の人皆仙聖の種なり。

『竹取物語』の原文をみると、作者たちは『列子』にどこまで頼っていたのかすぐに分かる。しかし中国のテキストをそのまま翻訳したというより、インスピレーションのもとにしていただろう。

「庫持の皇子には、東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに白銀を根とし、黄金を茎とし、白珠を実として立てる木あり。」(野口『竹取物語』：18)

「その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。黄金、銀色、瑠璃色の水、山より流れ出でたり。それには色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照り輝く木ども立てり。その中に、この取りて持ちてまうで来たりしは、いと悪かりしかども、『のたまひしに違はましかば』とて、この花を折りてまうで来たるなり。」(野口『竹取物語』：28)

ところが、『竹取物語』の作者たちは大事なことを忘れている。それは、珠の枝を食べて、不死の者になるということである。ひょっとすると、当時の読者は『列子』の話をよく知っていたので、言及する必要がなかったのかも知れない。

第三の右大臣阿倍御主氏は火鼠の皮衣を持ってくるよう言われた。右大臣は二人の皇子たちのように騙すような人ではなかったが、自分一人で求められた物を探しに行くような人間ではなかった。しかし、中国人の商人を使い、手に入れさせた。残念なことに、その中国の商人は彼に偽物の皮衣を売ってしまう。大臣は簡単に騙された。この場面に、平安文学には珍しく、当時の商売の形が見え、王慶という中国人の商人の性格も上手に描かれている。火鼠の皮衣、あるいは燃えない皮衣も『列子』などの中国の作品にでている。

「周穆王大征西戎，西戎獻銀鍔之劍，火浣之布。其劍長尺有咫，練鋼赤刃，用之切玉如切泥焉。火浣之布，浣之必投於火；布則火色，垢則布色；出火而振之，皓然疑乎雪。」(『列子』：湯問 17)

この火浣^{かかん}之布・火浣^{のぬの}布は中国南部の火山に住むとされる想像上の動物、火鼠の毛で織り、汚れたとき火に投入れると汚れがとれると伝えられる織物である。この『列子』の文ではその汚れのとれかたについて説明している。

同じく、残りの二人の求婚者はこの世になさそうな物を手に入れなくてははいけない。二つとも古

代中国のテキストにでてくるものである。第四の大納言大伴御行は龍の頸の珠を、第五の中納言石上麿足は燕の子安貝を持ってくるように言われた。この二人の求婚者は前の三人と違い、真面目に自分の命を難題にかけける。しかし、そのうち一人、中納言は、その命を落とす。龍の頸の珠は『莊子』に、燕の子安貝は『史記』に出ている。例えば『莊子』のこの部分にみられる。

「人有見宋王者，錫車十乘，以其十乘驕稚莊子。莊子曰：「河上有家貧恃緯蕭而食者，其子沒於淵，得千金之珠。其父謂其子曰『取石來鍛之！夫千金之珠，必在九重之淵而驪龍領下，子能得珠者，必遭其睡也。使驪龍而寤，子尚奚微之有哉！』今宋國之深，非直九重之淵也；宋王之猛，非直驪龍也。子能得車者，必遭其睡也。使宋王而寤，子為齧粉夫！」」（『莊子』：雜篇の列御寇 14）

この最後の求婚者たちの探していたものは再び、不死、あるいは永遠の命を得るものであった。求婚者は五人であると思われる。しかしながら、本当の最後の求婚者は六人目の日本の天皇であった。天皇であるから、難題は出されないが、天皇も永遠の命のテーマに一番明確に絡まれる。かぐや姫の昇天の前の別れの時に、不死の薬を貰った。しかし、本当の不死の薬！その薬を最終的に断ったのは、一番感動的な場面だと思うが、不死と永遠の命の話が何度も繰り返されるというのはきっと意味があるだろう。

3. 仏教と他界

それは、もう一つのイデオロギー、仏教の世界観に関係があると言える。仏教によると、この世、現世で無意味にエネルギーを費やすのは無駄である。お釈迦様の教で現世の煩惱と執着は因果、業をさらにわるくする。『竹取物語』の作者たちはこの観念で現世だけではなく、不死と永遠の命

を求める道教も批判している。仏教の本当の教えの分かる人間にとって不死の薬などのようなものは意味がない。仏教からみれば、道教の錬金術師が求めているものは全てただの幻想である。

勿論、天人や天女は道教的なテキストに現れるが、『竹取物語』に登場するかぐや姫と月から降りてきた人々はこの世の苦しみなどの感情を忘れた魂、仏教の世界を代表する物だと解釈したほうがよさそうである。

第二のグループの場面は他界との出会いを描写している。今述べたように、他界は道教的な世界でありながら、仏教の世界である。それゆえ、月の都へ昇天するかぐや姫と月の天人は道教の訓練のおかげで飛べたとも考えられるが、仏教の絵で頻繁にみられる阿弥陀菩薩の来迎、若しくはそのようなものだと考える。

4. 結論

『竹取物語』の世界は正に多文化の世界だと言える。現世の煩惱と執着そして多文化に満ちた道教的な幻想は仏教的な観念で批判されている。その上、同時に他界との出会いも不可欠な役割を果たしている。多文化共生、具体的には、月の都・インド・中国・日本の相対的な関係はこの物語の特徴だと思う。

参考文献

- 井上光郎『古代の三都を歩く：平安京の風景』文英堂、1994.
- 植垣節也『風土記』小学館、1997.
- 片桐洋一ほか『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（新編日本古典文学全集）小学館、1994.
- 小島憲之ほか『万葉集』1-4（日本古典文学全集）小学館、1971-1975.
- 高橋亨『源氏物語の詩学』名古屋大学出版会、2007.
- 野口元大『竹取物語』（新潮日本古典文学集成）新潮社、1979.
- 堀内秀晃ほか『竹取物語・伊勢物語』（新日本古典文学大系）岩波書店、1997.

Marra, Michele. *The Aesthetics of Discontent*, University of Hawaii Press, 1991.

Okada, H. Richard. *Figures of Resistance: Language, Poetry, and Narrating in The Tale of Genji and Other Mid-Heian Texts*, Duke University Press, 1991.

『列子』 <http://ctext.org/liezi>

『莊子』 <http://ctext.org/zhuangzi>